た。これらを、正確に系統別に分類することはできないが、江戸の祭り囃子を原流として、特に開港後、急速に分布を広げた形跡がある。

これと同じような時期に流布されたものに飴屋踊りがある。これは、粉屋踊とか万作踊ともいわれるもので、いわば農民芸能である。手踊りと、歌舞伎に模した段物という芝居を内容とするものである。これを保存会などを作って伝承している団体はないようだが、伝承者はかなり多く、今ならば復活が可能ではなかろうかと思われる。

鶴見区市場町熊野神社の宮司萩原家に伝わった神代神楽は、伝統も古く（現在同区矢向町の日枝神社の宮司萩原式典氏が所掌）、川崎市域にも出張して舞われている。市内には、この市場神楽のほかに、子安神楽の系統がある。

これらのほか、無形民俗文化財の範疇に含まれるものとしては、金沢区平潟漁業組合が行う汐祭り、旭区善部町妙蓮寺の御会式に演じられる曲題目、戸塚区戸塚町の「お札撒き」の踊り等がある。

また、古民謡やこれに類するものとして、横浜木遣保存会、南区にある野毛山節保存会、横浜古民謡保存協会等が、正統な伝統を次の世代に伝えるべく努力しておられるが、このほかにも、古民謡は、数多く残されている可能性が多い。

身近かな例では、先般行われた釜利谷開発地区の文化財調査で磯子区氷取沢の人々が歌ってくれた田植唄、焼米つき唄などは、民謡としては古い形が整っており、貴重なものであったが、このままでは、消滅を待つばかりである。

失われゆく民俗文化の保存を

市内の有形民俗文化財として、保存措置が講じられているものは、県立博物館に収蔵されているもののほか、八聖殿等、市の施設に納められている幾つかのものはあるが、計画的に集められたものや、国・県等の指定を受けるべきものは、皆無といってよい。民家にしても、このような面からみれば、無計画に近い開発と一時期の経済成長によって、めぼしいものは既に失われ、一部を除いては十分な調査さえも行われていない。また、江戸末期以降の海岸線の埋立によって、自然の海岸線は失われつつあるが、海岸線で伝承されてきた漁法等の民俗調査は、殆んど行われず、残された漁具等の計画的な収集保存はなされていない。

農業人口は年々減少して、戦前使用された農具も、農家の納屋の隅にほこりをかぶっている状態である。路傍の石仏は失われ、村・寺社・家庭を中心とした人々の生活や、信仰に伴う器具は、日を追って焼却場に運ばれ、時代の変遷と都市化の波は、市域の民俗の大半を失いつつある。

市民の、このような民俗文化をこのままの状態で放置することはできないので、幅広い市民の協力と市域内外に住む民俗学徒の助力を得て、その記録・保存・助成のため行政面での積極的な企画と指導と援助が必要であると思われる。

郷土史研究

横浜市図書館長　太田倹二郎

ここ数年来横浜市の各区から区史・郷土誌が相ついで刊行されている。その他民間有志によるそれぞれの地域の郷土誌も多数刊行され、いずれも市民から歓迎されているようである。

これらの区史・郷土誌の編さんには、郷土史家はもちろんのこと、郷土愛好者・土地の古老等多くの人々が協力をしているのであるが、そうした郷土研究に関心のある方々が、市内でどの位グループを組織しているであろうか。まず市教育委員会発行の横浜市文化団体名簿（一九七六年版）によると、郷土研究の項に寺尾郷土研究会を含めて五団体が記載されている。その他図書館で各区市民課等を通して知り得た団体は別表の通り七団体である。もちろんこの他にも団体があると考えられるが、拙速のことでありご容赦をいただきたい。

郷土研究団体のあり方はそれぞれ会の歴史もあってさまざまな形態をとっている。七団体の中で民間の自主的運営によるものは寺尾郷土研究会だけで、他の団体は区または図書館との協力で運営されている。郷土研究の裾野を拡げるという重要な役割を果しているこれら団体の運営はなかなか難しい面がある。

今後この種団体が増えてゆく可能性が多いとすれば、どのような形態をとるのが研究の上でも、活動の上でもよいのか、横の連係も必要があるのではないか等を、今後の運営の中で工夫していかねばならぬであろう。

現在神奈川県史・横浜市史等が刊行中であり、研究誌として神奈川県史研究を始めとして数種が刊行されて、県および県内の地方史研究は一段と進められている。このような状況の中で、市内各郷土研究団体が郷土研究の各分野にわたって丹念な調査研究を行って、その成果を発表して頂くならば、研究はさらに深まり拡げられることが期待される。

横浜市内の郷土史研究グループ

名　称	設　立	会　長	連絡所	会員	活動状況	刊行物
寺尾郷土研究会	昭和42. 4	兼子 道三	東寺尾6-23-11	125人	地元寺尾、鶴見地区の郷土歴史を系統的に調査研究。年数回史跡見学会・研究集会開催	諏訪坂を語る(パンフ) 生見尾村誌(51年刊) 鶴見寺尾城百話(53.3予定)
神奈川区の歴史をさぐる会	51. 5	金子吉之助	区市民課社会教育係	50人	神奈川区内とその周辺の調査見学（旧東海道神奈川宿周辺他5地区）、古老との座談会	神奈川歴史散歩 ①(50年刊) ②(51年刊)
保土ケ谷区史跡保存会	47. 8	北川順四郎	区市民課地域振興係	60人	区内史跡・名勝の保存、紹介郷土に関する資料の調査、研究紹介。	保土ケ谷の今昔(46年刊)
郷土戸塚歴史の会	50. 2	内田四方蔵	区市民課社会教育係	235人	拓本教室、古文書教室、史跡めぐりハイク、歴史講演会、寺めぐり。	会報の発行(年2回) その他資料発行
緑区郷土史研究会	51. 10	未　定	区市民課社会教育係	16人	郷土史研究家の交流と情報交換、古文書等の資料収集、研究成果の紹介等	
瀬谷区の歴史を知る会	49. 2	岩崎　肇	区市民課社会教育係	145人	瀬谷区の歴史編さん、古文書解読月例講座、年寄の話を聞く会、写真記録	会報「青史」(年2回) 瀬谷区の歴史・宗教編(50年刊) 生活資料編(51年刊)
横浜郷土研究会	33. 3	太田俊二郎	横浜市図書館	253人	古文書研究、考古調査研究、社寺調査研究、古道探査、関口日記解読、横浜歴史教室、歴史散歩、港北ニュータウン発掘協力、岡津発掘調査等の発掘調査、見学会	会報(年4回) グラフ横浜の歴史(49年刊) 横浜歴史散歩(51年刊)

瀬谷区の歴史を知る会の活動

会員　小林忠秋

五十年六月の中旬瀬谷区役所と、瀬谷区の歴史を知る会の共催で、瀬谷区民俗展が区役所内のフロアーと三階大会議室で、六日間盛況裡に開催された。

展示した資料は、区内から発見される古文書を始めとして、江戸時代から昭和初期に至る生活用具等一、三〇〇点の多きを数え、この催しは参観した区民のあらゆる階層を通じ、昔の瀬谷を振返るもの、また新しく知ろうという心を沸き立たせ、入場者も五千人近くとなかなか好評であった。

開催中は地方新聞にも報道されたこともあって、市外からの見学者も多く、小田原・茅ケ崎・川崎等からも熱心に来場され、なかには二日、三日と続けて参観された人もいたのには、関係者一同驚きと共に大いに感激した次第である。

これほどの成功を納めた民俗展であったが、これを企画したもの、資料の搬入、展示等にあたるものすべての会員が、実は何の経験もなく、ただ一生懸命の行動が区役所の協力と相俟って、一四区のなかでも顕著な催しとして衆目をあつめたことと考えられる。

この民俗展の開催によって、創立以来わずか一年三カ月の無名に等しかった「瀬谷区の歴史を知る会」が一躍区内の評判となり、実はこの記念行事を開催するもとになった「瀬谷区の歴史（宗教編）」の第一巻目の本が、たちまち売切れとなったこと、また会の行動が県史編集室担当者から注目され、同年八月には区内全域の旧家の土蔵等から、同室の指導によって一週間古文書等を探索する仕事を続け、貴重な資料が一万点以上発見されたことなど、昔を知ることに努める会員の意気ごみはますます盛んとなったのである。

この古文書資料をもとにした「瀬谷区の歴史（生活資料編(一)）」は、近世古文書の解読と解説、古老の話等を収録した、一冊二七〇頁の限定本として三千冊印刷され、第二巻として、五十一年十月に発刊されたのであった。

第二回発行に当っても、その後区内から発見された古地図、明治中期から昭和二十年頃までの記録写真、生活衣装等みなで五〇〇点ほどを瀬谷公会堂の全館を使用して四日間展示、歴史映画、請演、再開された郷土芸能とあわせて記念開催されたのである。

このようにして常に行動する本会は、前記の発見された資料と、これからの行